番外編　其の四

或る書評職人の眼

『ともいきの思想』

自然と生きるアメリカ先住民の「聖なる言葉」

波　那

――彼らは私を映す曇りのない鏡であり続けるだろう。
会うたびに気づかされる。きっと今後も。――

本作『ともいきの思想』はインディアン研究の第一人者、阿部珠理さんの初のエッセイである。20年以上にわたる研究の中に書き得なかった、ひとりの日本人として著者が彼らと向き合って得た気づきと心の軌跡の記録というべき1冊である。現代日本に生きる私たちと遠く北米の居留地に生きる彼らのあいだに必ずどこか通じ合えるところがあるという含みをもたせながら、日本の武士道にも一部通じるラコタ族の人々の精神性のなかにあるゆたかさを伝えていこうとする、真摯で淡々とした佇まいが心地よい。

ラコタ族の「聖なる言葉」は本書前半の章のタイトルに使われている。「足りることになっている」、「太鼓が来れば、祭りは始まる」、「人はそれぞれの歌を持つ」、「もらったものは、あげたとき本当のギフトになる」、「持つに相応しいものは、自ずとやって来る」――。いずれも示唆に富む言葉たちだ。欧米流の価値観を越えたラコタ流のやりかたに宿る心遣いと慮りに、作者がゆるやかに気づきを得ていくさまが各章で紹介されている。

貧困の失意のなかにもしたたかにしなやかに生きている、現代のラコタ族の人々の飾らぬ姿や、貧しさの連鎖から抜けるための試みが語られていく。その日常の過酷さがあってこそ人々の矜持や祈りが育まれ、ゆたかな教えと言葉が受け継がれてきたことがじんわりと伝わってくる。

例えば第五章「憎しみを越える」ではラコタ族の高等教育機関が出来るまでの流れと、合衆国のインディアン政策についても織り込みながら、シンテグレシュカ大学のラコタ学部で教鞭を取るアルバート・ホワイト・ハット氏のエピソードが語られる。60歳間近の人生の後半で教鞭に立ち、著した教科書が読み継がれるようになったアルバート氏が青年期の煩悶から更正するきっかけなったハンブレ

チア（ヴィジョン・クエスト）の描写が圧巻である。人里離れた場に4日の断食をしながら祈るうち、インディアンの虐げられた闇の時代の歴史の記憶を追体験する彼。民族の負った過去が痛恨と屈辱に満ちていたとき、ひとりの人間としてどのように乗り越えるのか。その結論に胸を打たれる。第九章「持つに相応しいものは、自ずとやって来る」に語られる19世紀末のラコタ族の族長ホロー・ホーン・ベアのひ孫、ドウェイン氏のエピソードもまた同様の転機を持つ。

一方、研究者として冷静に見つめ、語ってきた作者が一転深く内省する場面がある。第十章「畏まる」で、ひとりの青年の断酒祈願の儀式に居合わせた際に一心に祈る青年をみつめているときのことだ。

私に青年の祈りが響いた。胸に響くというのではなく、全身に
そして胸の奥深くに、響き落ちていった。青年は自分という
ものをすべてなげうって、ひたすらペヨーテの精にすがっている。
……徹底的な「無私」、ego-less の青年の世界に、私もいた……
自分をこれほど小さく感じたことは、なかった。

一見淡々と語られるありふれた日常や儀式の描写には、彼らの社会の暗澹とした過去を知り、長年寄りそってきた者にしか書けない穏やかで芯のつよいしなやかさが満ちている。読み進めるうちに次第にラコタ族の人々を他者として見つめていたのが、自分のすぐとなりの友に接しているかのような気持ちに変わっていく。それだけ著者のラコタ族の人々への想いは深い。

本書のタイトル『ともいきの思想』に、これという定義はない。読み終えてみると見返しの「エゴをふりかざして他者への配慮を忘れた現代日本人のお手本となるともいき（共生）の思想」という表現とはいささか異なった印象を受けた。むしろ「ともいきの思想」とはこの1冊を通して語られるさまざまなかたちの絆のことではないだろうか。大いなる自然と儀式を通じてつながりを感じるさま、ルーツも環境も異なる彼らと日本の私たちが縁を感じて生きていくさま、あるいは過去とつながりつつ現在へと課題を越えていくさま――それら全てをまあるく含んでいるようにも思える。あるいは、読者によってはそれぞれに違った想いを抱かれるかもしれない。そのゆるやかさが本書の味わいでもある。

なお、ラコタ族の来し方と、彼らが伝えてきた叡智や世界観についての記述は、既刊『アメリカ先住民の精神世界』（日本放送出版協会、１９９４）に詳しい。ご興味にあわせてお読みいただけたらと思う。

※本稿では、北米の先住民の呼称を作品中の呼称に合わせ「インディアン」と表記しています。

ともいきの思想

自然と生きるアメリカ先住民の「聖なる言葉」

著：阿部 珠理
刊：小学館　2010年6月（新書）
777円（740円+税）

波那（はな）

静岡県在住。夫＋子ども２人の４人ぐらし。
ネット書評家・五行歌人
２００８年オンライン書店ビーケーワンに
wildflower 名義で書評を書き始める。
２００９年５月９日「書評の鉄人」
２００９年10月16日「書評の鉄人列伝１９５回」
http://www.bk1.jp/contents/shohyou/retuden195
２０１０年３月９日 通算書評数２００本達成。
隔月刊誌『グラン パピエ』に書評の連載中

本を読むだけでなく、
読んであげるだけでもなく
何か、もっと先へ。
そう思って始めました。
食事と同じく、
読書は私たちの栄養に
なってゆくもの。
私の評は、その美味しさの
一滴をお伝えするために
在ります